慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーシアル教授のリカルド価値学説批評（下）
Sub Title	
Author	鈴木, 清吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.9 (1919. 9) ,p.1209(107)- 1216(114)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190901-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

學的法則、幷びに自然科學的因果律に過ぎざるべし。而も複雜多樣なる社會事象、文化現象に關しては、斯如き抽象化されたる法則は往々にして單なる論理的遊戯化さるゝこと多く、實際的史的現象の說明に役立つこと甚だ少し。人類の社會的現象の多數が一回的にして、個別的なりとせば、是等各自より抽象されたる法則は最早や社會現象の法則の域を脫して、自然法則に化し去るが故なり。故に余はこゝに歷史的法則と自然的法則とを區別せんと欲するなり。即ち歷史的法則は前述せるが如く、文化價値を目的として、しかあらんとする行程に於ける當爲の法則なりと思惟す。前述せる如く法則が意思の要求に基くものなるが故に、歷史的法則も亦一の目的價値に基き、意思要求の命令法の內容に外ならず。尙ほ意思に關しては後節に說く所あるべし。

余が斯く歷史的法則を認むる點に就ては、明かに前述せるリッケルトの所說に依れり。而も猶ほ文化科學對自然科學の嚴然たる區別を認むるを躊躇す。こは更に一層の研究を必要とすると信ずればなり。(6)

以上述べ來たれる所に依りて、大體余の現在思考せる歷史的法則の如何なるものなりやに就て略々明かにしたりと信ず。尙ほ斯如き史學認識論上の大問題を、未だ研鑽極めて淺き身を以つて、而も簡略に叙述し、輕々に斷定し去るは、素より亂暴の謗を免れずと雖も、こゝには唯現在の余の信ずる處を述べて、それが改定は更に一層の研究の後を待たんと欲す。

余の信ずる歷史的法則は以上述べたるが如きものなり。然らば經濟的史觀論は斯如き歷史的法則と如何なる關係を有するや。其の史觀論の內容に於て、歷史的法則は存在するや否や。

以下節を改めて論究すべし。

（註一）吾人が赤きものを見て、赤なりと斷定を下すは、單なる吾人の willkür にあらず。こゝに云ふ意思の要求とは絕對的意思の要求を指す。本文に述べたる如く各人の赤の概念の內容を異にするにも拘らず、吾人が赤てふ普通の觀念に立つは此の意思に基くものにして、これを宇宙意思と云ふも可なるべし。

（註二）Windelband:—"Die Prinzipien der Logik." S. 18
尙ほ法則に關しては西田幾太郎博士著「思索と體驗」に負ふ所多し。

（註三）Rickert:—"Der Gegenstand der Erkenntnis." 2A S. 212 ff.
（中川得立氏譯「認識の對象」二五三—三四三頁）

（註四）個別的因果律に關しては次の著書に負ふ所多し。
左右田博士「個別的因果律の論理」（「哲學雜誌」第三百七十六號所載）
Simmel:—"Probleme der Geschichtsphilosophie." Zweites Kapitel.

（註五）Seligman:— op. cit. pp. 102（譯書、〇二—三頁）
本書原著の本論文引用の最初の句は "For what is meant by a scientific law?" と云ふ疑問の解答なり。セリグマンは歷史的法則と科學的法則と區別せざるが如し。依つて引用文は前後の關係上却つて邦譯書の歷史的法則とせるに依れり。

（註六）本文中是等科學的分類の其の他哲學的問題に關して論究すべき點甚だ多し。此等すべて他日を期す。
（未完）

マーシアル教授のリカルド價値學說批評（下）

鈴木清吉

三

近代に於てこの光彩陸離たるリカルドの獨創に近づき得し者ジェヴンスに比すべきはなし。然れ共彼はリカルド及ミルに對し並に苛酷なる判斷を下し、其範圍並に科學的價値を兩者の眞

價以下に見たるものの如し。而して兩者がさまで重要を置かざりし價値の一方面を力説せんと欲するの餘り彼は「反復、考察、研究の結果予は價値は全然利用に基くてふ奇説とも云ふべきものに到達せり」と（原理一頁）の斷言を敢てするに至りしものならん。此所言たる其斷片的にして一方に偏せるものなること價値と生産費との關係に就てのリカルドが不用意なる約説と擇ぶところなきのみならず。更に誤易きもの、如し。況やリ氏は之を以て一大理論の一部に過ぎすと考へ其餘の部分に就ても亦説明を試みたるに於てをや。

ジエヴンス進で曰ふ「完全なる交換理論を獲んが爲めには財の所有量增減に基く利用變動の自然法則を探究せば可なり、所謂需要供給法則はこの完全なる交換理論の必然的歸結也……勞働は屢々價値を決定すとなさる、然れ共そは唯間接的方法即ち其供給の增加及び其制限により財の利用を變動せしむるに由て然るのみ。」後段論ずるが如く右二個の所論中後者は正確と明瞭とを缺くも既にリカルド及ミルにより殆んど同一形式の下に陳述せられたり。されど兩者共に第一の所論は認容せんとせざるものなるべし。これ彼等は利用變動の自然法則は極めて明瞭にして詳説の要なしと考へ、又生産費は生産者が販賣のため提供する供給量に關係なくば交換價値に影響するを得ずとなしなると同時に、彼等の學説は供給につき眞なるものは、其結果必然的に需要につきても眞なること、及び一財の利用は、購買者が市場より取去る分量に影響を及ぼさゞる場合には、其交換價値に何等影響を及ぼさざるの意を含むものなり。於茲飜つてジエヴンス第二版の中心思想をなせる因果律の連鎖を考格し、之をリカルド及ミルの採りし態度と比較せんか、ジエヴンス曰く、（一七九頁）

「生産費は供給を定む、
供給は最終利用を定む、
最終利用は價値を定む。」と。

此因果關係にして果して眞に存せば、其中間の過程を略し生産費は價値を定むと稱するも大過なからん。AはBの原因にして、BはC、CはDの原因なりとせば、AはDの原因なればなり然れ共實際かゝる關係存するに非ず。

第一の反對論は「生産費」及「供給」なる用語の曖昧なる點に向けらるべし、ジエヴンスは、其熟達せる準數學的術語を用ひこの咎を避く可かりしがリカルドに於ては然らず。更に非難を受くべきは彼の第三の叙述なり。何者諸々の買手が市場にて一物に對し支拂はんとする價格は、其物の買手に對する最終利用によりてのみ決定せられず、買手が各々處分し得る購買力の額と結合せし最終利用が決する也。一物の交換價値は一市場を通じて同一なり、されど交換價値に對する最終利用は市場の如何なる二部分に於ても等しからず。ジエヴンスは交換價値決定原因を考ふるに當り、「最終利用」なる語を以て「消費者の宛も支拂はんとする限度に於ける價格」なる語に代へ由て以て交換價値の根柢に一歩を近けし者なりと自認せり――此用語は本論文中にては「限界需要價格」と縮約せり。例者「交易團體の一方が穀物のみを有し、他方が牛肉のみを有す」る場合、兩者間に交換の行はるゝを述ぶるに當り（第二版一〇五頁）「一人」は圖表の一線によつて量られたる「利用」を得、他は他線によつて計られたる「利用」を失ふものとせり。然れ共之れ實際に非ず、交易團體は「一個人」に非ず、交易團體は其各員に取りて等しき購買力ある處の物を提供するも其物の各人に對する利用

は甚だ異れるなり。此は正にジエヴンスの自ら覺知せし處なりき。即ち終に「利用」及「不利用」に代ゆるに「需要價格」及「供給價格」を以てするに至る解釋を加へしため、其説は實際生活上の事實と首尾一貫せるものたるを得たり。然れ共其かく改補する時は、舊派經濟學者に對する攻擊力著しく減退し、更に此兩術語に對して嚴正なる字義上の解釋固持せらるゝに於ては、舊派の表現法は假令完全に正確なりと稱し得ざるも、尙ジエヴンス及其一派の者が之に代へんと努めしものに比し眞理に近きものあるが如し。

乍併ジエヴンス中心思想の形式的叙述に對する非難中其の最も大なるは、そが供給價格、需要價格及生産物の量は（一定の他の條件に支配され）相互に決定すと言はずして、順次連續的に決定すとなせる點なり。これ例者A.B.C.なる三個の球が同一椀中に在る時、重力の作用により相互に三個の位置定まると云はずして、彼はAはBの位置を定め、BはCを定むと云へるなり。然れ共此は又CがBを定め、BがAを定むと云ふも同ぐく誤れるものに非ず。ジエヴンスに答へて、其連鎖を顚倒し之に比して寧ろ却て當れる一個の連鎖を次の如く作るを得べし。

「利用は供給を定む、
供給は生産費を定む、
生産費は價値を定む。」と。

何者生産費は生産者をして仕事を經續せしむべき供給價格を決定すべければなり。

仍て次にリカルドの學説を顧みるに其説は系統なく且非難の餘地多きも、猶理論の根柢に於てより哲學的にして又實際生活と一層近接せるが如し。彼は曩に引用せるマルサス宛書簡中にて謂らく「財は其利用に比例して價値ありと論ずるセイ氏は價値の意義につき正當なる觀念を有するものに非ず。右の論は、買手のみが財の價値を支配するものなりせば、正當なるべし、即ち其場合には何人も物に對して認むる評價に應じて、其價格を支拂ふものと考ふるを得べし、然るに事實上買手が價格の支配に與かる所極めて少なるが如く考へらる。價格の決定は、全く賣手の競り合に基き、買手は事實上如何に金よりも鐵に對して多くの支拂をなさんと欲するも能はざるなり、これ供給は、生産費によりて支配せらるゝが故なり。……貴下は、需要と供給が價格を支配す云々と云はるゝも、そは無意味なりと思はる、其理由は本書の冒頭に錄し置けり、價値を支配するものは供給なり、而して供給は相對的生産費によりて制馭せらる。貨幣にて表はされたる生産費は、勞働の價値と同じく利潤の價値をも含むものなり。」（ボーナー編、書簡集一七三—六頁）彼は又次の書簡に曰く、「予は、決して穀價又は他品に對する需要の影響を爭ふものにあらず。乍併供給は直ちに需要の踵に接して起り、其手中に價格を支配するの力を持つに至る、而して供給の價格を支配するや供給自らは生産費によりて決定せらるゝものなり。」

是等の書簡はジエヴンスの著作續稿中には未だ出版せられず、然れ共リカルドの原論中には之と甚だ類似せる叙述あり。ミルも亦貨幣價値を論ずるに當りて（第三卷第九章第二節）曰く、「總ての財に適用せらると認めらるゝ需要供給の法則は、他の物品の場合と同じく貨幣の場合に於ても亦生産費の法則によりて支配せらるれども之に依て排除せらるゝ事なし。これ生産費にして若し供給に何等影響せざる限り、價値にも影響を及ぼさゞるべきを以てなり。」更に價値論を概括するに當りて曰く、（第三卷第十六章第一節）「由是觀之需要と供給とは凡ての場合に於

て價格の變動を左右し又其供給が自由競爭以外の要素によりて定めらるゝ處の總ての物の永久價値を左右す、然し自由競爭の下に於ては、物は普通生産者の各階級を通じ等しく利益の期待を許すが如き價格にて賣られ、又は斯る價値にて相互に交換せらる。而して此は物が其生産費の割合によりて交換せらるゝ場合にのみあり得る事なり。」又次頁に至り複合生産費 joint cost of production を有する財を論じて曰く「此場合生産費に據り難きを以て、生産費の法則以前に存する更に根本的なる價値法則即ち需要供給の法則に據らざるべからず。」と。

ジエヴンスは（二一五頁）此最後の點に關し、ミルの思想に含まるゝ謬謬に就て論じ「ミルは生産費以前の價値法則として需要供給の法則を論じゐるも、事實は生産費説を主張するに當りても需要供給の法則を全く捨てをらず。生産費は供給を支配し依て以て間接に價値に影響する條件の一たるに外ならざるなり。」と

此批評の最後の部分の用語は非難を招くの餘地ありと雖も重要なる眞理を含むもの丶如し。此批評にして、ミルの生時になされしとせば、蓋し彼は之を承認し、「生産費以前」なる語は、其眞意を現はさずとして撤回せしならん。「生産費の法則」と「最終利用」の法則とは、無上最高なる需要供給説の構成要素なり。兩者は夫れ剪刀の双刃にも比べらるべきか。一方の刃の靜止せる場合には、他方の刃動きて物を剪る。吾人は何の考へもなく、簡單に第二の刃が物を剪りたりと云ふべきも此言ひ方は正式の立言にあらず愼重なる辨明を要する處なり。

若しジエヴンスにして實際に於ては需要價格と價値の間にのみ存する關係を利用と價値との間に存するものの如くに論ずる習癖に陷らず、又需要上供給上の價値に對する一般關係の根本的均齊及び此はかゝる關係の詳細に亘りては甚しき相違を伴ふものなることを力説することクールノーの如くなることを得しならんには（數學式の應用はジエヴンスを導きて茲に至らしむ可しと豫期するは無理ならず）彼れのリカルド及びミルに對する反對は爾かく大ならざりしならん。然も吾人の忘る可からざるは、彼の筆を執りし時代は、價値論の需要方面多く等閑視せられしこと、及び彼が此方面に注意を喚起し、是を發展せしむるため、優秀なる貢獻をなしたることの二事是れなり。ジエヴンスの如く深く且つ多方面に於て吾人の感謝に値する思想家は甚だ稀なり。しかも此念のために、彼がその偉大なる先驅者に對してなせる批評を輕々に甘受すべきにあらざるなり。

特にジエヴンスの攻擊を擇びて之に答ふることは當を得たるもの丶如し。蓋し英蘭にては、彼れの説は他の何人にも優りて注意を惹きたるを以てなり。然れ共リカルドの價値論に對する同樣の攻擊は、多數學者の爲せし所なり。此中特に擧ぐべきをマックレオッド氏とす。氏は千八百七十年以前既に生産費對價値に關する舊派の所論に對し、形式内容共に近來の批評を豫見せしむるが如き批評を加へたり、近來の批評とはジエヴンスと同時代に屬する、ワルラ教授並にカール・メンガーのそれを意味す。フオン・ボエム・バヴエルク教授及ウヰザーは時代下れり。

時間要素に對するリカルドの粗漏は、彼の批評家によりて套襲せられ二重の誤解の因をなせり。何者彼等は生産費と價値との關係につき其究極の傾向に關する所論、即ち原因の原因論を、價値の一時的變化、即ち短期間に於ける變動原因により否定せんと企てたり。疑もなく彼等自

身の意見を發表せる場合、自家一個の意味にては其說は殆んど正當なり。形式上新說たるもあり、說を改めしものは更に多し。然れ共舊說に對し斬然相反せる價値新說を發見せりと稱すべき程進步をなせしものとも思はれず。又其發展擴張上著しく舊說を破れりと稱すべきものもなし。

以上は相異る物の相對的交換價値を支配する原因に就てのみリカルドの第一章を論ぜしなり。これ次で來る思想に及ぼせし影響主として此點に存すればなり。然れ共これもと勞働の價格が、如何の程度迄貨幣購買力を量る適好の標準なりやの論爭に關す。其關係は歷史的に興味ある事なり。仍て此に關してはホランダー敎授が千九百四年季刊經濟雜誌に寄せられし好論文ある事を一言するに止めん。

物價騰貴の『原因』の意義

高城仙次郎

一　物價騰貴の原因に關する論爭

我國の物價は休戰後一時低落の趨勢を示したのであるが、五月より亦々騰勢に轉じ、最近の平準は休戰直前に比して更に一割四五分の高率を呈するに至つたので、民間の論客は益々物價調節の急務を絶叫してゐる。彼等は物價騰貴の原因を以て通貨の膨脹に在りと爲し、其騰貴の趨勢を頓挫せしむるのみならず、進んで諸物價、殊に生活必需品の價格を人爲的に低落せしむる爲めに、通貨の收縮を斷行せねばならぬと切論してゐるのである。然るに、政府は通貨の收縮は不景氣、失業、恐慌等を招徠するものであるが故に、之を濫りに實行するは不得策であると稱し、今日迄（執筆當時迄）斷乎たる處置を採ることを避けてゐた。通貨收縮論者も通貨の人爲的收縮に依りて誘致せらるゝ諸物價の低落が企業熱を冷却し、景氣に多少の影響を與ふるに至る可きものであることを絶體に否定しては居らぬ。否な彼等の或者は寧ろ此影響を今日大に歡迎す可きであると論じてゐる。如何となれば、物價奔騰の爲めに、平時ならば企圖せられない幾多の製造業が今日濫興せられ、且つ計畫せられてゐるが、物價調節は此等の不自然なる事業を淘汰するに至る可きが故に、產業が一層健實なる基礎の上に置かるゝことに爲るからであると云ふのである。

通貨を無理に收縮せしむれば、物價は勿論低落するに違ゐない。又、此際物價が低落すれば、或る產業は打擊を蒙り、夫れが爲め一般經濟界が一時不景氣に襲はるゝに至る可きことも逆睹し難くは無い。さりながら、此一時的不景氣が果して、通貨收縮論者の信ずるが如く、結局一般國民の利益を增進するの結果を呈するに至るか否やは疑問とせざるを得ない。換言すれば、現內閣の微溫的政策と通貨收縮論者の唱道する急激的物價調節との孰れが結局國利民福を增進する上に於て最も效果あるか、と云ふことは容易に解決し難い問題である。實は双方共に相當の理窟がある。孰れの見地に立つも、尤もらしき議論を並べ立つることは容易である。此事は物價調節の可否のみに關する現象では無く、實は總ての政策共通の事實であると云ふを妨げ無い。『可否』、『良否』、『當不當』と云ふことは理論のみに依りて推斷し得るものではない。通貨が膨脹して物價が暴騰した爲めに細民が困窮して居るのであるから、細民を生活難より救ひ出すには通貨を收縮して物價を低落せしむれば良い